移動する視点、
通路の彫刻

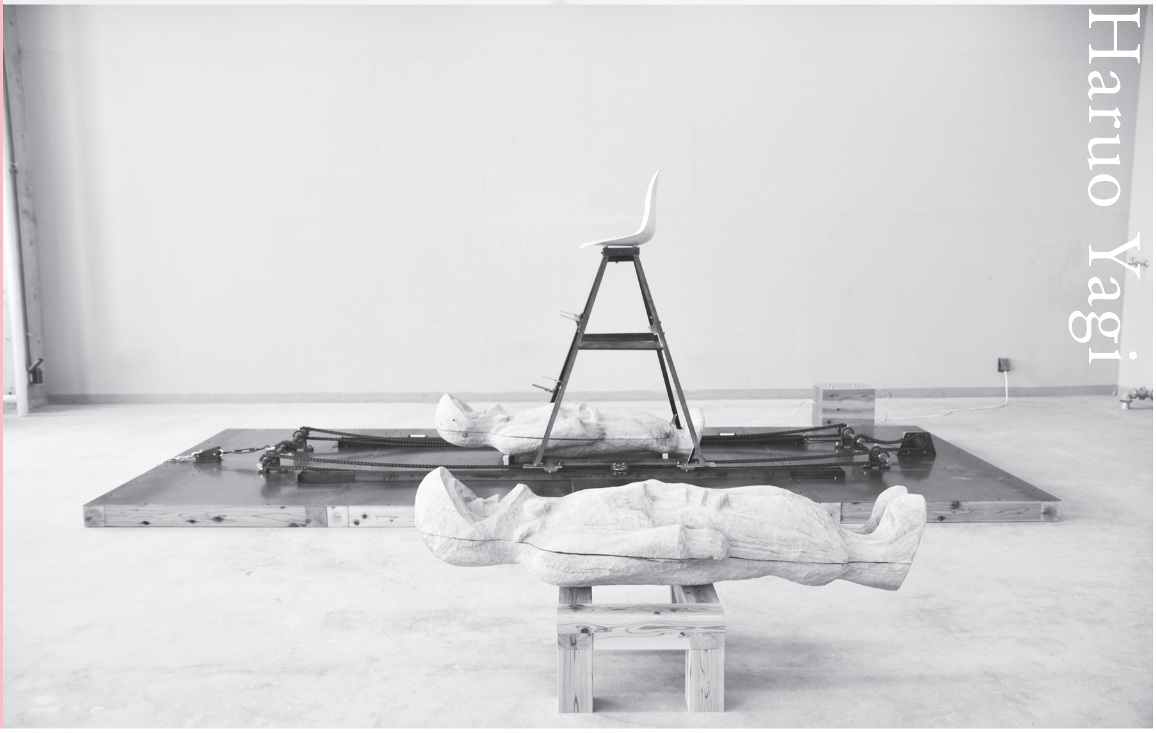
2021.8.12 [THU]
↓
10.22 [FRI]

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線
銀座駅コンコース
B7·B8 出入口付近

移動する視点

この空間は、
多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、
通り抜ける場所にある。
広場の彫刻」ではない、「通路の彫刻」は
可能だろうか。



MAU

主催：
公益財団法人 メトロ文化財団
企画監修：
武蔵野美術大学彫刻学科研究室

本展は、この場所（銀座）この空間（ガラスケース）から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応答しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

小林 このみ

犬に服を着せたような話　2020年

1999年　東京都生まれ

展覧会
2019年
「小平アートサイト よりみち芸術2019」小平中央公園（東京）
2020年
「ロスタイム」space33（東京）
2021年
「令和2年度 第44回 東京五美術大学連合卒業・修了制作展」
国立新美術館（東京）
2021年
「令和二年度 武蔵野美術大学 卒業・修了制作展」
武蔵野美術大学（東京）

受賞
2020年
国際瀧冨士美術賞　優秀賞・グランプリ

作家コメント
犬の散歩中、いつもの道。家なのかプレハブ小屋なのか、とにかく二階建てではない建物。それにはとても似合わない立派な青い看板に「なんとか健二ギター教室」犬の躾がなっていないので、いつもそこでリードを引っ張られてしまい苗字が確認できない。建物の裏には荒れた庭か畑。ギターの音は一度も聞いたことがない。

推薦…Azby Brown

小林このみさんは、エネルギッシュに、色彩豊かに、そして時にユーモアのある形で様々な芸術的なアプローチを融合させる、非常に多才な若いアーティストです。彼女の作品には、独創的な彫刻のオブジェ、ドローイング、空間デザイン、音楽そしてダンスが含まれてます。小林さんの創造過程は、非常に試行的であり自由で開かれています。そして、それは常に継続していて、止むことがありません。小林さんにとってドローイングは、どこにでも現わすことのできるものであり、あらゆる表面に描くことができます。しばしば、色鮮やかなドローイングを描き、そのドローイングをいくつか組み合わせた立体バージョンを作成し、そして、再びその立体の表面に描いていきます。彼女のオブジェには、往々色のついたFRPが使われ、絵の具のように重ね合わされていますが、ボリュームのあるオブジェというよりは、平な表面が形作られたオブジェです。小林さんは創作過程において、彼女のいくつかの閃めきを起点として、それと共に進み、発展し、大胆にも、始まりとは全く異なる結末を迎えるということが頻繁に起こります。彼女の作品は、楽しく予測できないものなのです。

伴 佳七子

“こちら”と“あちら”染みわたるような　2021年

作家コメント
うなされる夜がある。

寝返りをうちながら夢とうつつを彷徨う。

その時にやってくる何かの形をずっと留めて、ある日描く。

そこから現実で私たちが日常的にやっている行為で解釈し、自身の身体を通して石に落とし込むということを試みている。

駅通路というそれぞれの目的を持った人々が行き交う場の中で、通り抜けていったり滞留する空気を辿り、普段の制作で行っていることと繋げ、私が感じたことが現れる空間になればと思う。

1998年　山口県生まれ

展覧会
2019年
「小平アートサイト よりみち芸術2019」小平中央公園（東京）
2021年
二人展「パラレルポイント」武蔵野美術大学（東京）

推薦…箕輪亜希子

薄い半透明の皮膚のようなものがいくつか並べられ、その先に石彫が置かれている。同じ空間に置かれた2つの作品は彼女の中で関係を持って存在していた。半透明の作品は、木工用ボンドを窓ガラスに自らの身体を使って塗り付けたもので、彼女はそれを“瞬きをする時に見える残像を自分に取り込む行為”と表現している。石彫はボンドが乾燥した後、それらを窓から剥がす時の“心地良さや視覚的な印象”を彫りおこしたものだった。彼女が続けるトレッシングペーパーへのドローイングはおそらくこの半透明の作品とつながっている。その表面に残されるのは様々な色や形にならない線。それを頼りに何かを彫りおこすには頼りないものが多い。それでも彼女は石を彫る。彼女にとって石は、人間では把握しきれない時間を含み持った存在で、そこから出てくる形に外部からの力を感じているようだ。それは見えなかったものが生まれ出てくるような感覚。窓ガラスを通って入ってくる外光とその残像の関係はここでも反復される。何処からか押し寄せてくる把握しきれない自然という外部に対して、それと個人との間に生まれる現象としての残像を頼りに形を捕らえて引き剥がす。伴さんによって捕獲された形は曖昧だが底無しの世界を抱えている。

八木 温生

入れものと器と構造体(bedroom1)　2020年

1998年　栃木県生まれ

展覧会
2017年
「喚起 ムサビアートサイト2017」小平中央公園（東京）
「家を引っ張る」武蔵野美術大学（東京）
2018年
「彫刻科学生展示」武蔵野美術大学（東京）
2019年
「コネクト」武蔵野美術大学 課外センター（東京）
「ヨニズム」芸術祭グループ展 武蔵野美術大学（東京）
「ステューデントアートマラソン vol.15」blanclass（神奈川）
「小平アートサイト よりみち芸術2019」小平中央公園（東京）
「デモカレー」引込線　（埼玉）
2020年
「heterotopia」単独パフォーマンス 武蔵野美術大学（東京）

作家コメント
キノウについて
「キノウ」（≒「機能」）とよんだ時、ものの付与されたかたち、依存するイメージ、そこに積層する指紋から紐づけられた人間の営み、社会文化までをも含む「名前」になるように感じる。
時には創造した人間を取り込み、逆照射する鏡のような力を図らずしも備えたりする。それらの関係性や構造、効果が形となってくる場所の痕跡や軌跡として記録、保存されている（或いはその意思）という状態を再凝集、再消化を試みるものと言える。

推薦…永井天陽

うっすら光る豆電球、形をなぞるロープーウェイ、グルグル糸が巻かれてゆく木彫…。
八木の作品は一見、その“動き”や成り立ちに意図を探ってしまう。次に、どこか掴みきれない不思議さが残る。多くの思考や文字から、探索と見立てを繰り返した結果、妙な軽やかさと共に存在してしまうのが八木の作品なのだ。
彼の制作環境からも、同じ事を感じる。八木の制作スペースはまるで小爆発が繰り返されているかのように、いろんなものが散乱し転がっている。足の踏み場もないとはまさにこのこと。そのうち、騒然としたあれこれに目が慣れてくると、あちらこちらに試作やメモが発見できる。彼の内側が剥き出された場、何かを救い上げたり、また捨てたり…。そうして生まれる作品は「作った」というよりは、「残ってしまった」ものに近いのかもしれない。この足し引きされる関係には“宙ぶらりん”という言葉が、ぴったりくるように思う。
多くのショーウィンドウが並ぶ街、銀座。その一つ一つには美しく洗練された「意図」が凝縮されている。一方で、同じ街にあるこのショーウィンドウ型のギャラリーに不意に差し込まれるのは、八木の“宙ぶらりん”なものたち。さて、道ゆく人々にはどのように映るのだろう。